

修士論文のテーマの選択から記述まで

テーマ選びの時期と方法

- (1) テーマ選びが最も重要であるので、会計関連雑誌および書籍等を参考にして、現代の会計問題を中心に、修士課程1年生の夏休み前までにテーマを決める。
- (2) テーマは、自らの関心はもちろんであるが、この論文で何を明らかにするのかについて、必ず考えて選ぶようにする。

参考文献の選び方

- (1) 愛知学院大学図書館のウェブサイトから CiNii にアクセスをして、過去の和文研究書および和文研究論文をすべてリストアップする。
- (2) リストアップされた中で、特に、次の雑誌に注目してコピーする。
『会計』、『企業会計』、『JICPA ジャーナル』、『会計・監査ジャーナル』、『産業経理』、『旬刊経理情報』、『商事法務』等
- (3) 上記雑誌に今年度掲載されている論文は、データベース化されていないので、図書館でチェックする。
- (4) 最もテーマにマッチした最新の論文を読んで、その参考文献リストを参考に、新たな和文の文献および英語の文献をリストアップしていく。和文文献 150、英語文献 50 くらいを目標に集める。
- (5) 参考文献リストができれば、必ずチェックを受ける。
- (6) 修士課程1年生の夏休み中に、参考文献リストの作成と文献コピーを行う。会計基準書は必ず原本および訳本があれば訳本の両方をコピーする。

論文全般

- (1) 書籍・論文から、1つの段落をまるまる写さない。盗作になる。
- (2) 直接の引用は、「」でくくるが、極力少なくする。読みにくくなる。できるだけ自らが解釈をして、読みやすい文章で記述して、注をつける。
- (3) 文は短く。長くても3行まで。主語と述語に注意する。
- (4) 接続詞は極力少なくする。「そして」は使わない。

論文の目次および内容

- (1) 「目次」では、各章および各節を結びつける必要がないように、「目次」を見ることによって、論文の流れが読めるように注意する。
- (2) 「はじめに」では、このテーマを選んだ「意図」、本論文では何を明らかにするのかといった「目的」、その目的を満たすために焦点をどこにあてて研究を進めるのかといった「対象」、それらの目的を満たし、対象を研究する「方法」について記述する。
- (3) 各章の書き出しが、最も重要なので、何度も読み直して、わかりやすい文章にする。
- (4) 概ね「目次」は次のようにする。

目次
はじめに
第1章
 第1節
 (1)
 (i)
 (ii)
 (2)
第2章
 ・ ・ ・
 ・ ・ ・
要約と結論
参考文献

- (5) 文中で箇条書きを用いる場合には、①、②、・・・を用いる。さらに箇条書きで示す場合には、a.、b.、・・・を用いる。

本文および脚注での注意事項

- (1) 各国会計基準および設定機関の日本語訳、正式名称、および略語は、次のように記述する。
EX. (初出時) 国際会計基準審議会(International Accounting Standards Board: IASB)
 (2度目以降) IASB
- (2) 国名は、漢字語圏以外、カタカナで記述する。
- (3) 数字および英文表記は、半角入力とする。
- (4) 注は、各章末または各ページの下に一括掲示することとし、伝統的方式(文章の右肩に括弧数字で示す。1) 2) のような形式である。)による。
- (5) 図および表を引用する場合は、【出典】を明示する。図および表を作成した場合にも、参考とした【資料】を明示する。
- (6) 文献名の表示は、注および参考文献とも、次の形式による(コンマ、ピリオド、句読点の有無および場所に注意)。注では、引用箇所のページを表示する。参考文献リストでは、著書の場合にはページを示さない。論文の場合には、雑誌の中での論文が占めるページを示す。

注の書き方

- ① 各章で通し番号とする。(換言すれば、各章ごとに1) から始める。)

(著書)

- 1) 飯野利夫 [1985] 『財務会計論』(改訂版) 同文館. p.11。
2) Paton, W. A. [1960] *Essentials of Accounting*. Macmillan. p.213.

(雑誌に含まれる論文)

- 3) 森田哲彌 [1961] 「損益計算の方法と期間利益概念」『會計』第80巻第5号. 5月. pp.36-37。

- 4) Ijiri, Y., R. K. Jadeick & J. L. Livungston [1965] The Effect of Inventory Costing Methods on Full and Direct Costing. *Journal of Accounting Research*. Vol.3 No.1. Spring. pp.25-26.

(編著書に含まれる論文)

- 5) 上妻義直 [1993] 「EC の統合と会計情報」青木修・小川洌・木下照嶽編『社会発展と会計情報～変貌する企業環境への会計的アプローチ～』中央経済社. pp.210-211。
6) Beresford, D. R. [1979] Foreign Currency Translation: A Public Accountant's Perspective. D. D. AlHashim & J. W. Robertson eds. *Contemporary Issues in Accounting*. Bobbs-Merril Co. p.59.

(訳書がある洋書)

- 7) Hofstede, G. [1980] *Culture's Consequences*. SAGE Publishing. pp.100-101. (萬成博・安藤文四郎監訳 [1984] 『経営文化の国際比較』産能大. pp.122-124.)

(基準書等)

- 8) Accountants International Study Group (AISG) [1973] *Consolidated Financial Statements*, AISG, par.1.

参考文献リストの書き方

- ① 和書および洋書に区別して、それぞれ著書・論文・基準書等に分ける。
- ② 和書は「五十音順」、洋書は「アルファベット順」に作成する。

和書

(著書)

飯野利夫 [1985] 『財務会計論』(改訂版) 同文館。

(論文)

上妻義直 [1993] 「EC の統合と会計情報」青木修・小川洌・木下照嶽編『社会発展と会計情報～変貌する企業環境への会計的アプローチ～』中央経済社. pp.200-215。

森田哲彌 [1961] 「損益計算の方法と期間利益概念」『會計』第 80 卷第 5 号. 5 月. pp.30-45。

(基準書等)

企業会計基準委員会 [2007] 「企業結合会計の見直しに関する論点の整理」企業会計基準委員会。

洋書

(著書)

Hofstede, G. [1980] *Culture's Consequences*, SAGE Publishing. (萬成博・安藤文四郎監訳 [1984] 『経営文化の国際比較』産能大。)

Paton, W. A. [1960] *Essentials of Accounting*, Macmillan.

(論文)

Beresford, D. R. [1979] Foreign Currency Translation : A Public Accountant's Perspective. D. D. AlHashim & J. W. Robertson eds. *Contemporary Issues in Accounting*. Bobbs-Merrill Co. pp.50-75.

Ijiri, Y., R. K. Jadeick & J. L. Livungston [1965] The Effect of Inventory Costing Methods on Full and Direct Costing. *Journal of Accounting Research*. Vol.3 No.1. Spring. pp.20-35.

(基準書等)

Accountants International Study Group (AISG) [1973] *Consolidated Financial Statements*, AISG.

(初出時)

American Accounting Association (AAA) [1957] Accounting and Reporting Standards for Corporate Financial Statements, 1957 Revision. *AAA Accounting and Reporting Standards for Corporate Financial Statements and Proceeding Statements and Supplements*. AAA. (中島省吾訳 [1964] 『増訂 A.A.A 会計原則』 中央経済社。)

(2 度目以降)

AAA [1964] The Entity Concepts. *The Accounting Review*. April, pp.358-367.

(注において既に引用した文献と同じ文献を引用する場合の書き方)

- 1) International Accounting Standards Board (IASB) [2004] International Accounting Standard (IAS) No.27. *Consolidated and Separate Financial Statements*. IASB. par. 12. (企業会計基準委員会訳 [2017] 『IFRS 基準』 中央経済社。)
- 2) *Ibid.* par.15. (同訳書。)
- 3) 稲垣富士男 [1967] 『連結財務諸表論』 中央経済社. p.43。
- 4) 同書. pp.47-48。
- 5) 大雄令純 [1992] 「連結会計理論再考～FASB の DM との関連で～」『企業会計』第 44 巻第 6 号. 6 月. p.68。
- 6) 同論文. p.69。
- 7) IASB. *op.cit.* par.75. (同訳書。)
- 8) 稲垣富士男. 前掲書. p.50。
- 9) IASB [2003a] IAS No.39. *Financial Instruments: Recognition and Measurement*, IASB. par.1. (企業会計基準委員会訳 [2017] 『IFRS 基準』 中央経済社。)
- 10) *Ibid.* (同訳書。)
- 11) 大雄令純. 前掲論文。
- 12) IASB [2003b] Interpretation SIC-12. *Consolidation: Special Purpose Entities*. IASB. pars.7-8. (企業会計基準委員会訳 [2017] 『IFRS 基準』 中央経済社。)
- 13) IASB [2004] *op.cit.* par. 178. (同訳書。)
- 14) IASB [2003b] *op.cit.* par.10. (同訳書。)

15) IASB [2003a] *op.cit.* par.15. (同訳書。)

(作成日：2009年2月)

(最終更新日：2017年10月)